



## ネルヴァルとバヤールの演劇作品

著者	間瀬 玲子
雑誌名	筑紫女学園大学研究紀要
号	13
ページ	61-69
発行年	2018-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000946/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000946/</a>

# ネルヴァルとバヤールの演劇作品

間 瀬 玲 子

Nerval et les œuvres théâtrales de Bayard

Reiko MASE

## I. 序

19世紀フランスの作家ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は1830年代から1850年代まで『プレス』紙 *La Presse* や『アルチスト』誌 *L'Artiste* などに職業として劇評を発表していた。ガリマール社発行のネルヴァルのプレイヤッド版だけではなく、フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica から新聞及び雑誌に掲載されたネルヴァルの劇評の電子テキストを可能な限り入手した。また劇評の中でネルヴァルが言及している劇作品の電子テキストも可能な限り入手した。そして新聞及び雑誌と、言及されている作品の電子テキストを整理して保存作業を行っている。その結果ネルヴァルは劇評の中でジャン＝フランソワ・バヤール Jean-François Bayard の作品に関する言及が多いことがわかった。そこでこの両者の影響関係について考察を深めることにした。

## II. ジャン＝フランソワ・バヤールについて

ジャン・フランソワ・バヤールは1796年に生まれ、1853年に亡くなったフランスの劇作家である。数々の劇作品を残した人気劇作家であった。(1)すでに論じたことがあるフランスの劇作家ウジェヌ・スクリーブ Eugène Scribe と親密な関係であったとされている。(2)バヤールは当初は法律の勉強を行った。そして弛まぬ努力の末、1828年ジムナズ劇場 Gymnase で『16才の女王』*Reine de seize ans* で大きな成功を収めた。そしてバヤールはスクリーブの姪と結婚した。そして200以上の劇作品執筆に関わった。またヴァリエテ劇場 Variétés の支配人も務めた。そして『バヤールの演劇』*Le Théâtre de J.-F. Bayard* (1855-59、全12巻) が刊行された。このようにバヤールは19世紀前半に大いに活躍した劇作家でありながら、当時上演された作品の台本の電子版を入手するのは容易であるとは言えない。

スクリーブとバヤール共作の『代わりの者』《*Le remplaçant*》(3幕、バットン氏 Batton の音楽、オペラ・コミック劇場 Opéra Comique)に関してネルヴァルは『プレス』紙 1837年8月14日号に劇評を発表している。(3)なお本作品にはネルヴァル研究にとって重要人物とされるジェニー・コロン Jenny Colon が出演した。Gallica には残念ながら台本の電子テキストは収録されていない。

しかし舞台衣装の電子版が Gallica には収録されている。

マリー Marie 役のジェニー・コロンの舞台衣装を描いたカラー版エッチング（第1幕）

茶色、黄色、群青色のスカート、上部は黒色、スカーフはピンクと白、そしてかわいいリボンがアクセントとなっている。靴も黒である。この版画で描かれているジェニー・コロンの実物を忠実に再現しているかどうかはわからない。版画に描かれている女性は卵形の顔で、目が印象的である。顔は右向きである。(4)

ピシヨ Pichot 役のクデル Couderc の舞台衣装を描いたカラー版エッチング

薄水色の帽子、紺色のジャケット、そして黒っぽい半ズボン、黄色の靴下、黄色の靴をはいている。帽子の羽根飾りがアクセントとなっている。紺色のジャケットの中に8個のボタン付きの黄色のジャケットを着ている。舞台衣装としてはかなり凝った作りだと考えられる。(5)

マリー役のジェニー・コロンの舞台衣装を描いたカラー版エッチング（2幕と3幕）

白地に薄い赤のストライプが入った衣装。濃紺の前掛けがポイントとなっている。頭から胸のあたりにピンクのリボンが掛かっている。黄金色の十字架を身につけている。リボンと衣装のストライプのピンクはほぼ同色ではあるが、微妙に色合いが違う箇所がある。靴は黒である。濃紺の前掛けがないと平凡なデザインになってしまう。この版画では女性は左を向いている。1枚目の女性とこの女性を比較すると、顔が卵形、目がぱっちりとしているという点は酷似しているが表情に違いが見える。(6)

ジョルジュ Georges 役のレヴィアル Révial の舞台衣装を描いたカラー版エッチング（1幕と2幕）

全体的に白と濃紺を基調とした舞台衣装である。帽子についた赤いリボン、腰の赤い帯、半ズボンの下の赤いリボンがアクセントとなっている。(7)

ウジェーヌ・フォレスト Eugène Forest が描いた白黒のリトグラフィー（2幕）

版画の中央に二人の人物が描かれている。左側が僧侶、右側が軍人である。明らかに二人は言い争っている。左側に3人の僧侶がひとりの軍人をつかまえている。一番右側の女性は中央の軍人に懇願している。服装から察するに、中央の僧侶と軍人が他の登場人物よりも地位が高いと推察できる。左下に薄い署名の略号が記されている。(8)

ウジェーヌ・フォレストが描いたリトグラフィー（2幕）

上記の版画と全く同じ図柄である。違いは白黒のリトグラフィーと着色のリトグラフィーという点だけである。そして上部に LE MONDE DRAMATIQUE と明記されている。(9)

ネルヴァルは『プレス』紙での劇評では以下のようにマリー役を演じたジェニー・コロンの演技を絶賛している。

Nous n'avons plus à citer que la romance de Mlle Jenny Colon, qu'elle a chantée avec beaucoup de goût. On sait que cette actrice a fait de grands progrès depuis son entrée à l'Opéra-Comique ; sa voix est magnifique et se prête à l'expression, ce qui est rare dans les voix timbrées, ordinairement sèches et dures. Mlle Jenny Colon, qui est actrice est cantatrice à la fois, est devenue indispensable à l'Opéra-Comique, où elle soutient une partie du répertoire. (10)

私たちはもはやジェニー・コロンの恋歌を引用することしかない。彼女は高いセンスでそれを歌った。彼女がオペラ・コミック劇場に登場して以来大きな進歩をとげたことは知られている。彼女の声は素晴らしい、表現法に適合している、これは響きのよい、普通乾いた、きつい声では稀なことである。女優であると同時に女性歌手であるジェニー・コロンの嬢はオペラ・コミック劇場で必要不可欠となった、そこでは彼女はレパトリーの部分を支えている。

ネルヴァルの『代わりの者』に関する劇評は比較的長文である。当然ながら『代理人』のあらすじも紹介している。時は第一帝政時代（1804年から1814年）、場所はスペイン国境のピレネー山脈である。田舎における徴兵の抽選の場面から始まっている。版画として舞台衣装が残っているジョルジュとピシヨは友人同士である。良い番号がジョルジュ、悪い番号がピシヨにあたる。ジョルジュはピシヨに代わりの者になってくれと頼む。なおジョルジュはマリーに恋をしている。しかしその村に美しい士官が到着する。またその後僧侶たちも登場する。ネルヴァルがこの演劇に対して多大な興味を抱き、劇評に題名をつけて論じたのはいくつかの理由がある、ひとつはナポレオン1世の時代を舞台にした作品であること、そしてもうひとつはジェニー・コロンがこの演劇で主演女優マリーを演じたことが原因である。

本作品はスクリーブが筆頭作者であり、バヤールは二番目の作者である。よってバヤールの代表作ではない。ネルヴァルも劇評の中でバヤールについてはあまり言及をしていない。上記に記したように舞台衣装の版画の電子版が5枚も公開されているのに、肝心の台本の電子版が公開されていないのは非常に残念である。こういう作品こそ1830年代に観衆たちが求めた題材であったと考えている。

### Ⅲ. ネルヴァルが劇評のタイトルとして論じた作品群

本論文を執筆するに際して、プレイヤッド版のネルヴァル全集、19世紀の雑誌『アルチスト』誌、そして同じく19世紀の新聞『プレス』紙を精査した。その結果ネルヴァルはバヤールのいくつかの作品を劇評のタイトルとして挙げている。その中でフランス国立図書館電子テキストサイト Gallica 等で電子テキストを入手することができたのは次の二作品であった。ひとつは『プレス』紙1838年

5月21日号に劇評の対象として書かれた『証券取引所でのゴゴ氏』 *Monsieur Gogo à la Bourse* である。(11) 1幕1景の軽喜劇である。1838年5月16日パリのヴァリエテ劇場で初めて上演された。すでに述べた『代わりの者』と違い、ネルヴァルは劇評の中の一部で「軽喜劇、ジムナーズ劇場、ヴァリエテ劇場」 *Vaudeville. — Gymnase. — Variétés.* と副題をつけ、その下に *Le lac de Gomorrhe. — La Bourse. — M. Gogo.* 『ゴモラの湖』『証券取引所』『ゴゴ氏』と書いている。つまり『証券取引所のゴゴ氏』は劇評のごく一部で論じられているにすぎないのである。ネルヴァルはこの作品について詳しく論じているわけではない。もっぱら軽喜劇（ヴォードヴィル）とは何かについて集中して論じている。『証券取引所のゴゴ氏』の台本の電子版を読む事によって次のことが理解できた。主人公ゴゴ氏を含めて総計15名が登場する。舞台は居間であり、テーブルと家具が出てくるだけである。バヤールの主要作品とは言えないが、軽喜劇とは何かを教えてくれる作品である。(12)

他方はネルヴァルが『アルチスト』誌 *L'Artiste* 1844年6月9日号で劇評の対象とした『田舎風の夫』 *Le mari à la campagne* である。(13) この作品に関してネルヴァルは詳しい分析を行っている。1844年6月3日月曜日、パリのテアトル・フランセ劇場 *Théâtre-Français* で初めて上演された。この演劇の台本は *Gallica* で入手可能である。不思議なことに舞台装置、舞台衣装の電子化は行われていない。(14)

『田舎風の夫』の登場人物は以下のとおりである。

Ferdinand Colombet フェルディナン・コロンベ  
César Poligny セザール・ポリニー  
Edmond, amant de Pauline エドモン、ポーリーヌの愛人  
M. Mathieu, ami de la maison マチュー氏、一家の友人  
Un domestique 召使い  
Ursule, femme de Colombet ユルシュル、コロンベ氏の妻  
M<sup>me</sup> d'Aigueperse, mère d'Ursule デギュスペルス夫人、ユルシュルの母  
Pauline, sœur de Colombet ポーリーヌ、コロンベ氏の姉妹  
M<sup>me</sup> de Nohan, jeune veuve ノアン夫人、若い未亡人  
Justine, femme de chambre ジュスティーン、小間使い

台本の冒頭には挿絵がついている。第3幕第15場を描いている。これは最終の場である。一番左の男はガウンを着ている。そしてすぐ隣の男性と話をしている。真ん中の女性は右を向いているので顔が見えない。左には二組の男女が立っている。一番左の男性以外はパーティー用の正装をしている。

第1幕は地味な趣味の家具付きの居間である。11場から成っている。第1幕で特筆すべきことは第4場におけるセザールの次のせりふである。

(*A Mathieu, qui remue des papiers.*) N'est ce pas, monsieur? Je n'aime pas les Tartufes! (15)

(書類を運ぶマチューに) そうではないですか? 私は偽善者たちが好きではない。

タルチュフの綴りは Tartufe または Tartuffe である。たとえ複数形であったとしても17世紀の劇作家モリエール Molière の喜劇『タルチュフ』を思い出す場面である。タルチュフは偽善者という意味で使われている。この場面が『田舎風の夫』の一側面を端的に表している。また1幕では登場人物の芸術的な好み、例えばオペラ、オペラブッフア(喜歌劇)、音楽、ダンスパーティーが話題となっている。そしてパリのパレ＝ロワイヤル Palais Royal が登場する。パレ＝ロワイヤルはフランス革命後には用途が色々変わったが、この演劇が上演された頃は劇場も含めて娯楽の中心地であった。(16)

第2幕は劇評の執筆者であるネルヴァルにとって馴染みの場所であるパレ＝ロワイヤル、そして当時のオペラ座 Opéra Le Peletier が台詞の中に登場する。(17)またサン＝シュルピス教会 Saint-Sulpice も台詞に登場する。この教会がフランスの歴史上非常に大きな役割を果たしたことはつとに有名である。

ついに第3幕となる。話は相変わらず舞踏会等に明けくれている。5場でレストラン・ヴェフル Vefour が台詞の中に登場する。創業1760年の有名レストランであり、パレ・ロワイヤルの一角で営業を続けている。1844年当時もこのレストランに通うことが一種のステータスであったと考えても間違いではないと考える。そして第9場でセザールの次のような台詞が書かれてる。

Vas-tu faire l'hypocrite avec ta femme, qui sait tout? Ta belle-mère n'est pas là? (18)

君はすべてをしている君の妻にこれから偽善者ぶるのか? 君の義母はそこにはいないのか?

また第8場のセザールの台詞に「何人かの偽善者」quelques Tartufes(19)が書かれている。タルチュフという台詞は2度目である。この点を考えると『田舎風の夫』はモリエールの『タルチュフ』を手本として書かれた作品と考えてよいと思われる。

バヤールの『田舎風の夫』に登場する台詞にはオペラ、バレエ、オペラブッフア、舞踏会、ダンスパーティー、夜の宴、レストランが登場する。当然ながらシャンペン、花束、パンチ(飲み物)、アイスクリーム屋も登場する。そして登場人物たちの愛憎関係が主たるテーマである。これが1844年のパリの演劇を鑑賞した人々たちが好むテーマであったと考えられる。ネルヴァルとしては馴染みのあるパレ＝ロワイヤルが出てきて、劇評執筆者としてではなく、鑑賞者として楽しんだはずである。さて肝心のネルヴァルの劇評であるが次のように書いている。

Mesdemoiselles Denain, Brohan Garique, et enfin mademoiselle Doze, quelle heureuse, aimable et florissante jeunesse! Madame Volnys, encore, quelle séduisante maturité! Je ne parle pas de madame Mélingue, autre belle personne qui a un pied dans le cothurne et l'autre dans le soulier de satin; mais est-il une troupe ailleurs plus complète en talents, plus riche en beautés? (20)

ドゥナン、プロアン、ガリック嬢たち、そしてついにドーズ嬢、なんと幸福で愛想がよく澁刺とした若さ。ヴォルニー夫人、まだ魅力的な成熟さ！ 私はメラング夫人について話していない、厚底の靴の中の片方の足、サテンの短靴の別の足を持った別の美しい人物。他に才能においてより完全で、美しさにおいてより豊かな劇団があるだろうか？

ネルヴァルは劇評の中で女優を褒めたたえているだけではない。『田舎風の夫』が明らかにモリエールの『タルチュフ』を下敷きにした作品であることを認識している。バヤールはタルチュフのという単語を複数形で使用した。それに対してネルヴァルは劇評の中でタルチュフを単数で表している。またモリエールという人名も記載している。なお『田舎風の夫』の台本ではテアトル・フランセ劇場で上演されたと書いてあるが、ネルヴァルの劇評では長年使われた名称であるコメディ・フランセーズで上演と記されている。この劇作品はネルヴァルの文学修行、つまりモリエールの『タルチュフ』の考察の道具としての色彩が強いと考えている。ネルヴァルは後の作品で偽善者を描いたこともないし、また人間関係のもつれや社交界の様子を描いたこともない。

#### IV. ネルヴァルが題名だけ言及した作品

さてネルヴァルは上記の作品以外にバヤールの作品に関して題名だけ言及している作品がかなり存在する。また表題には題名を書いてもあまり詳しく論じていない場合もある。以下に列挙した作品はネルヴァルが言及した作品をすべて網羅したわけではない。

*Frétillon ou la bonne fille* 『フレティヨンまたは良い娘』 5幕のヴォードヴィル（軽喜劇）1834年12月13日にパレ＝ロワイヤル劇場で初演（台本の電子版あり）<sup>(21)</sup>

*Le Gamin de Paris* 『パリの子供』 2幕のコメディ・ヴォードヴィル（軽喜劇）1836年1月30日、ジムナーズ・ドラマチック劇場で初演（台本の電子版あり）<sup>(22)</sup>

*La Marquise de Prétintaille* 『プレタントーユ侯爵夫人』 1幕のコメディ・ヴォードヴィル（軽喜劇）、1836年4月23日にパレ＝ロワイヤル劇場で初演された（台本の電子版あり）

*Les Trois Bals* 『3つの舞踏会』 3幕のヴォードヴィル（軽喜劇）1839年2月6日ヴァリエテ劇場で初演（台本及び舞台衣装の電子版あり）<sup>(23)</sup>

*Mathias l'invalid* 『マチアス、傷ついた軍人』 2幕のコメディ・ヴォードヴィル（軽喜劇）1838年6月5日にヴァリエテ劇場で初演（台本及び台本の電子版あり）なお本作品では兄弟であるアントワーヌ・バヤール Antoine Bayard が協力している。



*La Marchande à la toilette* 『化粧室での女商人』 2幕のコメディ・ヴォードヴィル、1840年5月13日にヴァリエテ座で初演された。(台本の電子版あり)

*Marcelin* 『マルスラン』 3幕の演劇、1840年5月30日にヴォードヴィル劇場で初演された(台本の電子版あり)

*Mon gendre !* 『私の婿!』 1幕のコメディ・ヴォードヴィル、1840年7月11日にジムナーズ・ドラマチック劇場で初演された(台本の電子版あり)

*Trianon* 『トリアノン』 2幕 歌唱付きの喜劇、1840年10月8日にパレ＝ロワイヤル劇場で初演された(台本の電子版あり)

*Le Viconte de Létorières* 『レトリエール子爵』 3幕、音楽付きの喜劇、1841年12月1日パレ＝ロワイヤル劇場で初演(台本の電子版あり)<sup>(24)</sup>

*La Fille du régiment* 『軍隊の娘』 2幕のオペラ・コミック(喜劇オペラ)、1840年2月11日にオペラ・コミック劇場で初演(台本の電子版あり)この作品の筆頭作者はサン＝ジョルジュである。バヤールは2番手の作者である。DVDで鑑賞することが可能である。<sup>(25)</sup>

## V. 結論

冒頭にも記したようにバヤールの作品の中でネルヴァルが劇評の題名として取り上げた作品の台本の電子テキストまたは舞台衣装、舞台装置の版画を入手することは不可能ではないがかなり困難である。舞台装置、舞台衣装の版画の電子版はほとんど入手することができない。逆に驚いたことは、Gallicaがバヤールの『田舎風の夫』の登場人物及び概要に関して音声サービスを始めたことである。

バヤールの劇評執筆を通してネルヴァルが行ったことは、フランス文学の演劇、ギリシャ悲劇、外国の演劇の学び直しだったと考えている。『田舎風の夫』ではモリエールの『タルチュフ』が台詞の中に登場し、ネルヴァルは劇評でその点についてしっかりと論じている。一言でいうと、ネルヴァルにとって劇評執筆は生活の糧を得るためであると同時に文学修行の過程であつと言えるであろう。

## 注

(1) G. Vapereau, *Dictionnaire universel des littératures*, Paris, Librairie Hachette, 1876, p.213.

(2) 間瀬玲子「ジェラルール・ド・ネルヴァルとウジェーヌ・スクリーブ」『筑紫女学園大学・筑紫女学園



大学短期大学部紀要』第10号、2015年1月、pp.57-68.

- (3) *La Presse*, 14 août 1837. 『プレス』紙は Gallica に収録されている。Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, pp. 367-372. 以下ネルヴァルのこの巻を PL, I と略す。ネルヴァルのプレイヤッド版全集は『プレス』紙の表記を忠実には再現していない。オペラ・コミック劇場は Nicole Wild, *Dictionnaire des théâtres parisiens*, Lyon, Symétrie, 2012, pp. 329-333によると所在地が転々としている。1832年9月24日～1840年4月30日までブルス・ホール *salle de la Bourse* にあったとされている。オペラ・コミック劇場は現在は場所を変えて現役の劇場として使われている。
- (4) [Le remplaçant, opéra-comique de Scribe, Bayard et Batton [image fixe] : costume de Jenny Colon (Marie)], Paris, Martinet, 1837.
- (5) [Le remplaçant, opéra-comique de Scribe, Bayard et Batton [image fixe]: costume de Couderc (Pichot)], Paris, Martinet, 1837.
- (6) [Le remplaçant, opéra-comique de Scribe, Bayard et Batton [image fixe] : costume de Jenny Colon (Marie)], Paris, Martinet, 1837.
- (7) [Le remplaçant, opéra-comique de Scribe, Bayard et Batton [image fixe]: costume de Révial (Georges)], Paris, Martinet, 1837.
- (8) Forest, Eugène, [Le remplaçant, opéra-comique de Scribe et Bayard: scène du 2ème acte [image fixe]/ Eug.Forest [sig]; Lith. Caboche, Grégoire & C.ie], 1837.
- (9) Forest, Eugène, Le remplaçant, scène du 2me acte, Théâtre de l'Opéra Comique [image fixe] : [estampe]/ Eug.Forest [sig] : lith. Caboche, Grégoire & C.ie, [Paris] : [Le monde dramatique], [1837]. (8) とはフランス国立図書館における整理番号が違う。 *Le monde dramatique* 『演劇界』はネルヴァルが私財を投じて刊行した雑誌である。しかし1836年頃には人手に渡っていたとされている。
- (10) *La Presse*, 14 août 1837. PLI, p.371.
- (11) *La Presse*, 21 mai 1838. PL I, pp.405-411. Jean-François-Alfred Bayard, *Monsieur Gogo à la Bourse* [Texte imprimé] : vaudeville en 1 acte et 1 tableau, Paris, Marchant, 1839 (Gallica).
- (12) 注(1)で紹介した *Dictionnaire universel des littératures* には『証券取引所のゴゴ氏』は言及されていない。
- (13) Jean-François Bayard et Jules de Wailly, *Le Mari à la campagne*, comédie en 3 actes, Paris, Marchant, 1844 (Gallica). 以下 M. Marchant と略す。注(1)で紹介した *Dictionnaire universel des littératures* では『田舎風の夫』が言及されている。共作者のジュール・ド・ヴァイーは1806年に生まれ、1866年に亡くなったフランスの演劇作家である。彼の演劇は当時の有名な劇場で上演された。しかしネルヴァルは劇評でこの作家を注目していたわけではない。なお『田舎風の夫』が上演されたテアトル・フランセ劇場はコメディ・フランセーズ劇場 *Comédie française* のことである。注(3)で紹介した *Dictionnaire des théâtres parisiens*, p. 102によるとコメディ・フランセーズは1804年からはテアトル・フランセと呼ばれていた。1848年2月～1852年12月までは共和国劇場 *Théâtre de la République* と呼ばれていた。
- (14) Jean-François Bayard et Jules de Wailly, *Le mari à la campagne*, comédie en trois actes, Paris, impr. Dondey-Dupré, [s.d.] (Gallica)にアクセスすると、4分間の音声を聞くことができる。音声の内容は登場人物の紹介と演劇の概要である。
- (15) M. Marchant, p.5.
- (16) 2014年に現地調査を行った。現在ではパレ＝ロワイヤルのすぐ近くにパレ＝ロワイヤル劇場がある。外側の階段の構造が独特である。
- (17) 2017年に現地調査を行った、19世紀当時のオペラ座は存在しない。強いていうと、その跡地にあるホ

テル等の名前に Le Peletier が使われ、通りの名前にも使われている。

- (18) M. Marchant, p.27.
- (19) M. Marchant, p.29.
- (20) *L'Artiste*, 9 juin 1844.この記事の表題は LE MARI A LA CAMPAGNE, OU *Rien de trop. — Rentrée de mademoiselle Dose.* (田舎風の夫、または大してない、ドーズ嬢の復帰。) PLI, p.816も参考にした。
- (21) 注(1)で紹介した *Dictionnaire universel des littératures*, p.213に題名が記載されている。
- (22) *Dictionnaire universel des littératures*, p.213.
- (23) *Dictionnaire universel des littératures*, p.213.
- (24) *Dictionnaire universel des littératures*, p.213.
- (25) *Dictionnaire universel des littératures*, p.213.

#### 参考にした DVD

La Fille du régiment

作曲 ガエタノ・ドニゼッティ

指揮 ブリュノ・カンパネッラ

マリー役 ナタリー・ドウッセー

ロイヤル・オペラハウス

ロンドンのロイヤル・オペラハウスで初演されたのは2007年1月11日である。

DVD 制作 ERATO、映像制作に際し、BBC が協力している。

謝辞 本研究は平成29年度筑紫女学園大学特別研究助成費の研究成果の一部です。

(ませ れいこ：英語メディア学科 教授)

